



## 『和英語林集成』にみる地理用語の訳定

著者	齋藤 元子
雑誌名	明治学院大学教養教育センター紀要 : カルチャー ル = The MGU journal of liberal arts studies : Karuchuru
巻	5
号	1
ページ	1-9
発行年	2011-03
その他のタイトル	Japanese Translation of Geographical Terms in J. C. Hepburn's Japanese-English and English-Japanese Dictionary
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/806">http://hdl.handle.net/10723/806</a>

# 『和英語林集成』にみる地理用語の訳定

齋藤元子

館のデジタルアーカイブスを活用した。

## 1. はじめに

本研究は、地理教育史の視点から、ヘボンにより編纂された『和英語林集成』の「英和の部」にどのような地理用語が収録され、いかなる訳語が与えられているかを明らかにすることを目的とする。

日本の教育史上、明治初期は翻訳教科書時代と呼ばれ、欧米の書籍を底本とする教科書が多数出版された。この中には、当時欧米で使用されていた地理教科書を翻訳したものも含まれていた。しかしながら、翻訳された地理用語に統一性はみられず、“geography”という言葉一つをとっても、「地理」・「地学」・「地誌」など複数の訳語が存在した<sup>(1)</sup>。

本研究では、1873（明治6）年に刊行された最初の官製地理教科書である『地理初歩』において定義が示されている地理の基礎用語が、『和英語林集成』の初版（1867年・慶応3年）、再版（1872年・明治5年）、三版（1886年・明治19年）のいずれに取り上げられているかを調査する。そして、その訳語に着目し、『地理初歩』との比較を通して、『和英語林集成』における地理用語の訳出の特徴を考察する。さらには、『地理初歩』の訳語が『和英語林集成』の初版あるいは再版からの影響を受けているかを考えてみたい。なお、『和英語林集成』の調査には、明治学院大学図書

## 2. 『和英語林集成』の「英和の部」について

ヘボンの『和英語林集成』は第一部の「和英の部」と第二部の「英和の部」から構成されているが、「慶応の末年から明治年間にかけてひろく用いられた和英辞典として、わが国における英学史上貴重な文献である<sup>(2)</sup>」という評価が定着しているように、頁の大半を占める第一部の「和英の部」に関心が注がれてきた。よって、本研究で扱う「英和の部」に関する研究は、「和英の部」に比して少ないと言わざるを得ないが、「英和の部」の訳語には「和英の部」にはない語や「和英の部」の後の版になって現われる語が含まれていること、当時実際に使用されていた語彙が収められている点から日本語資料としての価値が高いことなどが、先行研究により指摘されている<sup>(3)</sup>。

「英和の部」に収録されている語彙は、初版10,030語、再版14,266語、三版15,697語である<sup>(4)</sup>。国語学の塩沢和子氏によれば、「英和の部」は版を重ねるごとに訳語を大量に増補し、しかもその大半が新たに明治になって作られた訳語と考えられ、実際の言語生活に役立つ近代語の辞書としての性格を強めていったということである<sup>(5)</sup>。

ヘボンの書簡集をみると、『和英語林集成』に関して「将来、宣教師たちの助けとなり、その労

力を軽くしたいのです。少なくとも、この辞書なしに言語を学ぶより四分の三の労力を軽減したいのです。辞書または資料的な助けなくしては、日本語を学ぶことがどんなにむずかしいか、わたしはもちろん、当地の宣教師ども一同もよく知っているのです<sup>(6)</sup>、「辞書編纂こそ正しい出発点と申せましょう。これなくしてまた日本語の十分な知識なくしては、聖書を翻訳する十分な資格に欠けることが多いのです<sup>(7)</sup>」、「『和英語林集成』は上海のミッション印刷所で立派に出版されました。それが日本語を学ぶ人々に少なからざる手引きとなることは勿論、多数の熱心な日本人が英語を研究する上に大きな助力となるならばよいと望んでおります<sup>(8)</sup>」といった記述がある。これらの文面から『和英語林集成』は、宣教師の伝道活動と聖書翻訳とともに日本人の英語学習の助けにもなることが期待されていたといえよう。

本研究の冒頭にも述べたように、明治初期は多くの翻訳教科書が作成された時期であった。ヘボンが望んだ日本人による『和英語林集成』の活用の一例として、それら教科書の翻訳作業の段階において、「英和の部」を参照した可能性は考えられないであろうか。前掲の塩沢氏が指摘した「新たに明治になって作られた訳語が版を重ねるごとに多く収録された」という「英和の部」の特徴は、欧米のテキストブックを日本の教科書に作り変えるという作業にも役立つものであったと充分に推測できる。本研究では、『地理初歩』を事例としてその可能性を探ってみたい。

### 3. 『地理初歩』について

『地理初歩』は、文部省の指示を受けて師範学校内に設置された編輯局により、『小学読本』・『小学算術書』などとともに、1873（明治6）年に刊

行された最初の官製教科書である。19世紀後半のアメリカにおいて広く普及していた初等地理教科書 *Cornell's Primary Geography* を底本とし、その一部を翻訳したものであり、明治初期の翻訳教科書時代を代表する教科書といえる。横長の和紙13枚を半分にした十三丁の本文と表紙からなる小冊子で、第一回から第八回までの単元で構成されている。第一回から第六回までは地球や地理の概念、第七回と第八回は地理用語の定義が示されている<sup>(9)</sup>。

学期制、小学校は下等小学と上等小学からなり、いずれも4年制であった。一学年を二級に分け、下等八級に始まり、4年間で下等一級を修了し、上等八級に進む仕組みとなっていた。師範学校制定の小学教則によれば、『地理初歩』は下等六級で学習することが規定されていた。つまり、今日的に言えば、小学校2年生の前半、7歳から8歳の児童を対象とした教科書であった。

本章では、『地理初歩』の第七回・第八回に掲載されている地理用語、言い換えれば、底本である *Cornell's Primary Geography* から訳出された地理用語を示す。そして、次章において『和英語林集成』の「英和の部」におけるこれら用語の採録ならびに訳語の比較を試みたい。『地理初歩』も底本の *Cornell's Primary Geography* も、上述したように、児童向けの教科書であり、取り上げられている地理用語は、地理の基礎用語といえるものである。よって、これらの基礎用語が『和英語林集成』に収められているか否かは、地理学の観点から非常に興味深い事柄である。

まずは、『地理初歩』が *Cornell's Primary Geography* から翻訳収録した地理用語の原語を便宜上①から⑩までの番号をつけて示そう。①island, ②peninsula, ③isthmus, ④cape, ⑤promontory, ⑥shore, ⑦coast, ⑧mountain, ⑨volcano, ⑩

ocean, ⑪sea, ⑫gulf, ⑬bay, ⑭strait, ⑮channel, ⑯lake, ⑰river, ⑱brook, ⑲creek, ⑳rivulet, ㉑rill, ㉒cataract, ㉓water-fall 以上の23語である。

『地理初歩』は1873(明治6)年最初の官製教科書の一冊として刊行された後、早くも翌年の1874(明治7)年に改訂版が出されている。上記の地理用語の訳語に関しても、若干の変更が見られる。そこで①から㉓までの初版の訳語を示しながら、改訂版で異なった訳語が与えられた用語には、カッコ内にその訳語を示す。①island: 島, ②peninsula: 半島, ③isthmus: 地峡(地頸), ④cape: 岬(崎), ⑤promontory: 巒(訳語なし), ⑥shore: 浜, ⑦coast: 浜, ⑧mountain: 山, ⑨volcano: 火山, ⑩ocean: 大洋, ⑪sea: 海, ⑫gulf: 湾, ⑬bay: 港, ⑭strait: 海峡, ⑮channel: 溝, ⑯lake: 湖水(湖), ⑰river: 川, ⑱brook: 溪水(小川), ⑲creek: 溪水(小川), ⑳rivulet: 溪水(小川), ㉑rill: 溪水(小川), ㉒cataract: 滝(瀑), ㉓water-fall: 滝(瀑)

①から㉓までの用語は、それぞれ簡潔に定義づけられている。例えば、①島は「周邊ヲ、水ノ囲ミタル地ヲ、嶋ト云フ」、⑧山は「陸地ノ中ニ於テ、土石ナドノ、集リ重ナリテ、平地ヨリ、高クナレルモノヲ、山ト云フ」とある<sup>(10)</sup>。これらは底本 *Cornell's Primary Geography* の “An island is land surrounded by water” と “A mountain is a very large mass of rock and earth, which is considerably elevated above the surrounding country” を翻訳したものである<sup>(11)</sup>。

『地理初歩』が出版された1873(明治6)年当時、文部省の顧問として教育行政に深く関与していたのが、ヘボンと同じくアメリカから来日した宣教師で、後に明治学院の教師となったフルベッキである<sup>(12)</sup>。フルベッキは、『和英語林集成』が

出版される以前からヘボンの辞典編纂事業に注目しており、「まもなく日本語を学ぶには、なくてはならないものが得られる」とアメリカの友人に宛てた手紙に記している<sup>(13)</sup>。師範学校において『地理初歩』の刊行に向けた *Cornell's Primary Geography* の翻訳作業が進められていた時、文部省顧問であったフルベッキが、すでに刊行されていた『和英語林集成』を翻訳の参考書として提示した可能性は充分に考えられる<sup>(14)</sup>。

#### 4. 『和英語林集成』収録の地理用語

本章では、前章で示した『地理初歩』掲載の23の地理用語が『和英語林集成』にも収録されているか否かを明らかにするとともに、『地理初歩』の訳語との比較を試みる。なお、『和英語林集成』の「英和の部」における訳語はローマ字表記となっているが、本稿では、カタカナに改めて表記し、該当する漢字をカッコ内に示す。

##### 1) 初 版

まず、1867(慶応3)年に刊行された初版に関して、前章で①から㉓の番号を付した地理用語の収録状況ならびに訳語を調査した。その結果を示すと以下ようになる。

①island: シマ(島), ②peninsula: なし, ③isthmus: なし, ④cape: サキ(崎)・ミサキ(岬), ⑤promontory: ハマ(浜), ⑥shore: イソ(磯)・キシ(岸), ⑦coast: カイヘン(海辺)・ウミバタ(海端)・カイガン(海岸)・ウミベ(海辺), ⑧mountain: ヤマ(山)・サン(山), ⑨volcano: ヤケヤマ(焼山)・カザン(火山)・ヒノヤマ(火の山), ⑩ocean: ウミ(海)・カイ(海)・ナダ(灘), ⑪sea: ウミ(海)・カイ(海), ⑫gulf:

イリウミ (入海)・ウチウミ (内海), ⑬bay : イリウミ (入海)・ウチウミ (内海), ⑭strait : セト (瀬戸), ⑮channel : ミオ (滞)・フナミチ (船道), ⑯lake : ミズウミ (湖)・コスイ (湖水), ⑰river : カワ (川), ⑱brook : タニガワ (谷川), ⑲creek : なし, ⑳rivulet : タニガワ (谷川)・オガワ (小川), ㉑rill : なし, ㉒cataract : タキ (滝), ㉓water-fall : タキ (滝)

23の地理用語のうち、『和英語林集成』の初版には19の用語が収録されている。未収録は②peninsula・③isthmus・④creek・⑤rillの4用語のみで、採録率は8割を越している。つまり、『和英語林集成』は初版の段階で、基礎的な地理用語をかなり掲載しているといえることができる。

次に訳語を見てみよう。『地理初歩』の訳語と共通するのは、①island : 島, ④cape : 岬・崎, ⑧mountain : 山, ⑨volcano : 火山, ⑪sea : 海, ⑯lake : 湖水・湖, ⑰river : 川, ⑳rivulet : 小川, ㉒cataract : 滝, ㉓water-fall : 滝の10語である。

## 2) 再 版

1867 (慶応3)年の初版から5年後の1872 (明治5)年再版が刊行された。「英和の部」には、初版の10,030語より4,236語多い14,266語が収録されている。地理用語に関しても増補がなされているか調査を行った。その結果、23の地理用語のうち、初版に収録されていた19語に加えて、新たに③isthmus・④creek・⑤rillが収められているのが認められた。つまり、再版の段階で、②peninsulaを除く、23語中22の地理用語が収められ、採録率は96パーセントに達している。

訳語に関しては、初版の訳語をそのまま踏襲しているものもあれば、初版の訳語を削除して新た

な訳語を示しているもの、初版の訳語に新たな訳語を加えているものなど、様々である。以下に、再版における①から㉓までの訳語を示す。初版には見られない新たな訳語については、訳語にアンダーラインを付す。また、初版には存在し、再版において省かれた訳語を〈 〉内に示す。

①island : シマ (島), ②peninsula : なし, ③isthmus : チキョウ (地峡), ④cape : ミサキ (岬)〈サキ (崎)〉, ⑤promontory : ハマ (浜), ⑥shore : イソ (磯)・キシ (岸), ⑦coast : イソ (磯)・カイガン (海岸)・ウミベ (海辺)・カイヘン (海辺)〈ウミバタ (海端)〉, ⑧mountain : ヤマ (山)・サン (山), ⑨volcano : ヤケヤマ (焼山)・カザン (火山)・ヒノヤマ (火の山), ⑩ocean : ウミ (海)・カイ (海)・ナダ (灘)・オキ (沖), ⑪sea : ウミ (海)・カイ (海)・ナダ (灘), ⑫gulf : イリウミ (入海)・ウチウミ (内海), ⑬bay : イリウミ (入海)・ウチウミ (内海), ⑭strait : セト (瀬戸), ⑮channel : セ (瀬)・ミオ (滞)・フナミチ (船道), ⑯lake : ミズウミ (湖)・コスイ (湖水), ⑰river : カワ (川), ⑱brook : タニガワ (谷川), ⑲creek : コガワ (小川)・イリウミ (入海)・イリイ (入江), ⑳rivulet : タニガワ (谷川)・オガワ (小川), コガワ (小川), ㉑rill : タニガワ (谷川)・コガワ (小川), ㉒cataract : タキ (滝), ㉓water-fall : タキ (滝), バクフ (瀑布)

『地理初歩』と共通する訳語は、初版では①island : 島, ④cape : 岬・崎, ⑧mountain : 山, ⑨volcano : 火山, ⑪sea : 海, ⑯lake : 湖水・湖, ⑰river : 川, ⑳rivulet : 小川, ㉒cataract : 滝, ㉓water-fall : 滝の10語であったが、再版では、新たに訳語が収められた③isthmus : 地峡,

⑱creek：小川，⑳rill：小川も『地理初歩』と共通している。よって、再版の段階では、『地理初歩』と共通する訳語は23語中13語ということになる。

### 3) 三 版

1872(明治5)年の再版から14年後の1886(明治19)年、三版が刊行された。「英和の部」には、再版の14,266語より1,431語多い15,697語が収録されている。再版に比べて、新たに収められた語彙の数は多くないが、訳語の大幅な増補が顕著であるとの指摘がなされている<sup>(15)</sup>。

地理用語に関しては、本稿で調査対象としている23の地理用語のうち、22語が再版までに収録済みであることを明らかにしたが、三版においても、22語が依然収録されているか、そして、再版では未収録であった⑳peninsulaが新たに収録されているかをまず調査した。その結果、①から⑳の地理用語すべてが三版に収録されているのが確認できた。よって、三版の段階で、『地理初歩』が示した23の基礎的な地理用語のすべてを『和英語林集成』が収録したことになる。

三版については、上述した大幅な訳語の増補に加えて、掲げられた訳語には、明治になって一般語として広く用いられるようになり、しかも、その多くが今日も日常語として用いられている語が多く認められるとの指摘もある<sup>(16)</sup>。この指摘が地理用語にも該当するか否かは興味深い点であるが、2)の再版の節と同様に、三版における①から⑳までの訳語を示す。再版には見られない新たな訳語については、訳語にアンダーラインを付す。再版には存在し、三版において省かれた訳語はない。

①island：シマ(島)，②peninsula：ハントウ(半島)，③isthmus：チキョウ(地峡)，④cape：ミ

サキ(岬)，⑤promontory：ハマ(浜)，⑥shore：イソ(磯)・キシ(岸)，⑦coast：イソ(磯)・カイガン(海岸)・ウミベ(海辺)・カイヘン(海辺)・カイヒン(海浜)，⑧mountain：ヤマ(山)・サン(山)，⑨volcano：ヤケヤマ(焼山)・カザン(火山)・ヒノヤマ(火の山)，⑩ocean：ウミ(海)・カイ(海)・ナダ(灘)・オキ(沖)・タイヨウ(大洋)，⑪sea：ウミ(海)・カイ(海)・ナダ(灘)，⑫gulf：イリウミ(入海)・ウチウミ(内海)・ワン(湾)，⑬bay：イリウミ(入海)・ウチウミ(内海)・イリエ(入江)・ワン(湾)，⑭strait：セト(瀬戸)，⑮channel：セ(瀬)・ミオ(濤)・フナミチ(船道)・カイキョウ(海峡)，⑯lake：ミズウミ(湖)・コスイ(湖水)，⑰river：カワ(川)，⑱brook：タニガワ(谷川)，⑲creek：コガワ(小川)・イリウミ(入海)・イリエ(入江)，⑳rivulet：タニガワ(谷川)・オガワ(小川)・コガワ(小川)，㉑rill：タニガワ(谷川)・コガワ(小川)，㉒cataract：タキ(滝)，㉓waterfall：タキ(滝)・バクフ(瀑布)

『地理初歩』と共通する訳語は、再版では①island：島，③isthmus：地峡，④cape：岬，⑧mountain：山，⑨volcano：火山，⑪sea：海，⑯lake：湖水・湖，⑰river：川，⑲creek：小川，⑳rivulet：小川，㉑rill：小川，㉒cataract：滝，㉓waterfall：滝の13語であった。三版では、再版から踏襲された13語に加えて、新たに訳語が収められた②peninsula：半島，訳語の追加がなされた⑩ocean：大洋と⑫gulf：湾の3語が共通している。したがって、三版に至って、『和英語林集成』と『地理初歩』の共通する訳語は23語中16語ということになった。

以上、『和英語林集成』初版，再版，三版における地理用語の収録状況ならびにその訳語をみて

きた。本章のまとめとして、『地理初歩』の訳語と比較できる形で、その内容を一覧表にして示す(表1参照)。

## 5. 『和英語林集成』における地理用語 訳出の特徴

前章では、『和英語林集成』初版、再版、三版における地理用語の掲載状況ならびに『地理初歩』との訳語の比較をおこなった。その結果、『地理初歩』が翻訳掲載した23の基礎的な地理用語のうち、初版では19語、再版では22語、三版では23語すべてが収録されていた。初版と再版は『地理初歩』以前に刊行されている。よって、『和英語林集成』は、官製の地理教科書が誕生する前に、地理の基礎的な用語を十分に収録した英和辞典として存在していたということができよう。

前章で示した『和英語林集成』における地理用語の訳語をみると、一つの用語に対して複数の訳語が当てられている場合がほとんどである。それらは「島」「山」「海」「川」といった現在一般的に用いられている語もあれば、「ウミバタ(海端)」、「ヤケヤマ(焼山)」、「ヒノヤマ(火の山)」、「フナミチ(船道)」のように、地理用語としては今日ほとんど耳にしない語もある。後者は、幕末から明治にかけて日常的に使われていた語であろう。『和英語林集成』の「英和の部」は、日本で布教活動を行っている宣教師に一般に通用する日本語を提供する役割が与えられていた<sup>(17)</sup>。「ウミバタ(海端)」や「ヤケヤマ(焼山)」といった訳語は、宣教師の言語生活に役立つ言葉として収録されたと考えられる。

一方、『地理初歩』の訳語は、第3章に示したように、一語につき一つである。さらに、それらは現在も地理用語として一般的に使用されている

ものである<sup>(18)</sup>。『地理初歩』が底本の *Cornell's Primary Geography* から訳出した語は、児童向けではあるものの、近代の学術用語の提示であり、日常的に慣れ親しんだ言葉である必要はなかった。

『和英語林集成』と『地理初歩』との共通の訳語は、調査の結果、初版10語、再版13語、三版16語あることが判明した。『地理初歩』の訳語の約半数は『和英語林集成』と共通しており、既述したヘボンとフルベッキとの関係からも、文部省が初版ならびに再版に注目していた可能性は高い。しかし、そのことのみを根拠として、『地理初歩』が『和英語林集成』を参照したと言い切れるものではない。

『和英語林集成』の初版・再版と『地理初歩』に共通する①island: 島, ③isthmus: 地峡, ⑧mountain: 山, ⑨volcano: 火山, ⑩sea: 海, ⑯lake: 湖, ⑰river: 川といった訳語は、当時刊行されていた他の地理学関係の翻訳書にも認められる。例えば、『和英語林集成』の初版と同年の1867(慶応3)年に刊行された『地学初歩和解』も、上記の①island: 島から⑰river: 川まで、すべて同じ訳語である<sup>(19)</sup>。したがって、『和英語林集成』と『地理初歩』との共通の訳語は、『地理初歩』による『和英語林集成』参照の可能性を想起させるものの、むしろ、地理書の翻訳者たちが複数の関連書籍を参照し合って、用語の統一を図ろうとしていたことの表れではないかとみるのが妥当であろう。

『和英語林集成』における地理用語訳出の特徴は、むしろ、『地理初歩』とは異なる訳語において見出せるといえよう。それは上述した「ウミバタ(海端)」、「ヤケヤマ(焼山)」、「ヒノヤマ(火の山)」、「フナミチ(船道)」といった訳語である。これらは当時の日本人が日常生活において使用していた言葉を、ヘボンが地理用語の訳語として採録した

表1 『和英語林集成』と『地理初歩』における地理用語の訳語

Cornell's Primary Geography	『地理初歩』初版	『地理初歩』改訂版	『和英語林集成』初版	『和英語林集成』再版	『和英語林集成』三版
island	島	島	シマ	シマ	シマ
peninsula	半島	半島	—	—	ハントウ
isthmus	地峡	地頸	—	チキョウ	チキョウ
cape	岬	崎	サキ, ミサキ	ミサキ	ミサキ
promontory	巒	—	ハマ	ハマ	ハマ
shore	浜	浜	イソ, キシ	イソ, キシ	イソ, キシ
coast	浜	浜	カイヘン, ウミバタ, カイガン, ウミベ	イソ, カイガン, ウミベ, カイヘン	イソ, カイガイ, ウミベ, カイヘン, カイヒン
mountain	山	山	ヤマ, サン	ヤマ, サン	ヤマ, サン
volcano	火山	火山	ヤケヤマ, カザン, ヒノヤマ	ヤケヤマ, カザン, ヒノヤマ	ヤケヤマ, カザン, ヒノヤマ
ocean	大洋	大洋	ウミ, カイ, ナダ	ウミ, カイ, ナダ, オキ	ウミ, カイ, ナダ, オキ, タイヨウ
sea	海	海	ウミ, カイ	ウミ, カイ, ナダ	ウミ, カイ, ナダ
gulf	湾	湾	イリウミ, ウチウミ	イリウミ, ウチウミ	イリウミ, ウチウミ, ワン
bay	港	港	イリウミ, ウチウミ	イリウミ, ウチウミ	イリウミ, ウチウミ, イリエ, ワン
strait	海峡	海峡	セト	セト	セト
channel	溝	溝	ミオ, フナミチ	セ, ミオ, フナミチ	セ, ミオ, フナミチ, カイキョウ
lake	湖水	湖	ミズウミ, コスイ	ミズウミ, コスイ	ミズウミ, コスイ
river	川	川	カワ	カワ	カワ
brook	溪水	小川	タニガワ	タニガワ	タニガワ
creek	溪水	小川	—	コガワ, イリウミ, イリイ	コガワ, イリウミ, イリイ
rivulet	溪水	小川	タニガワ, オガワ	タニガワ, オガワ, コガワ	タニガワ, オガワ, コガワ
rill	溪水	小川	—	タニガワ, コガワ	タニガワ, コガワ
cataract	滝	瀑	タキ	タキ	タキ
water-fall	滝	瀑	タキ	タキ, バクワ	タキ, バクワ



ものであろう。「海」や「山」のように近代教科書で取り上げられる言葉ではないが、当時の人々が景観や地理的な形態をどのような言葉で言い表していたかを知ることができる貴重な資料である。国語学の研究者により、『和英語林集成』は「外国人にとって理解し難いものを除いて、幕末から明治前期にかけての日本語を正確に記述していると言ってよく、この時期の国語資料として第一級のものである」との評価がなされているが<sup>(20)</sup>、地理学の視点からもこの評価は十分に当てはまるといえよう。

## 6. おわりに

本研究は、ヘボンにより編纂された『和英語林集成』の「英和の部」に着目し、同書において、どのような地理用語が取り上げられ、いかなる訳語が与えられているかを明らかにした。

その結果をまとめると、日本で最初の官製地理教科書である『地理初歩』が米国の地理教科書 *Cornell's Primary Geography* から訳出した23の地理用語のうち、『和英語林集成』は『地理初歩』刊行以前の段階で、22の地理用語を収録していることが判明した。この数値は、ヘボンが地理に関連する言葉の収集に対しても意欲的であったことを物語っている。

さらに、その訳語について考察した結果、約半数の用語が『地理初歩』と共通していた。しかしながら、『地理初歩』が既刊の『和英語林集成』初版ならびに再版を参考にしたかという問いに対しては、当時出版されていた地理学関係の翻訳書などと合わせて参照した可能性があるとの回答が妥当である。

『和英語林集成』の訳語の特徴という点においては、前章で述べたように、むしろ、『地理初歩』

とは異なる訳語が注目に値する。明治初期に刊行された翻訳書や教科書が、西洋の語彙を日本語化することに苦闘した結果生まれたものであるのに対して、『和英語林集成』は日本で活動する宣教師の日常会話の助けになることを第一の目的として編纂された。よって、収録されている地理用語は、学術用語の翻訳ではなく、当時の日本人が日ごろ使用していた地理にまつわる言葉を拾い集めたものである。人々は会話の中で火山を「焼山」や「火の山」と語っていたにちがいない。このような言葉は、明治期の訳語研究の分野においては、研究対象として浮かび上がってこないものであろう。だが、過去の人々が、景観や地形をどのように知覚し、どのような言葉を用いてそれを表現したかということに関心を抱く地理学においては、ヘボンが収集した“日常的な地理言葉”は、実に興味深い語彙群である。『和英語林集成』は、地理用語の訳出研究の資料としてのみならず、幕末・明治期における“日常的な地理言葉”を提供するユニークな資料といえよう。

## 注

- (1) 鈴木直枝「明治前期の学術書にみる翻訳態度——有賀長雄訳『標註 斯氏教育論』をめぐる——」、国語学研究 35, 1996, 35頁；鈴木直枝「明治前期の学術書にみる翻訳——有賀長雄訳『訳註 如氏教育論』と高嶺秀夫『教育新論』の検討から——」、国語学研究 36, 1997, 23・25頁。
- (2) 松村明「解説」(J.C.ヘボン『和英語林集成』講談社学術文庫, 1980), 965頁。
- (3) 「英和の部」に関する代表的な先行研究として以下の文献がある。菊地悟『『和英語林集成』「英和の部」の性格』、文藝研究 103, 1983, 34-43頁；塩沢和子「和英語林集成・英和の部の訳語」(森岡健二編著『改訂 近代語の成立 語彙編』、明治書院, 1991) 428-463頁。
- (4) 前掲書(2), 976頁。一方、「和英の部」の収録語彙は、初版 20,772語、再版 22,949語、三版 35,618語(前掲書(2), 973頁)と「英和の部」よりもはるかに多い。

- (5) 前掲書(3), 塩沢, 433-434頁。
- (6) 高谷道男編訳『ヘボン書簡集』岩波書店, 1977, 153頁。
- (7) 前掲書(6), 172頁。
- (8) 前掲書(6), 189頁。
- (9) 『地理初歩』の詳細ならびに *Cornell's Primary Geography* との関係については次の文献に詳しい。齋藤元子「師範学校編纂『地理初歩』とその底本」, 地理学評論 78-6, 2005, 413-425頁。
- (10) 師範学校編纂『地理初歩 全』文部省, 1873。
- (11) Cornell, S. S. *Cornell's Primary Geography*, 2nd ed., New York: D. Appleton and Company, 1857, p. 12 • p. 14. (1st edition is in 1854)
- (12) 文部省顧問としてのフルベッキの活躍については次の文献に詳しい。尾形裕康『学制実施経緯の研究』, 校倉書房, 1963, 39-73頁。
- (13) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社, 1978, 34頁。
- (14) 1874(明治7)年明治政府は『和英語林集成』の再版を2,000部買い上げている(早川勇「和英辞典の歴史」, 言語と文化〈愛知大学〉14, 2006, 5頁)。だが、『地理初歩』刊行以前における買い上げに関しては不明である。
- (15) 前掲書(2), 978頁。
- (16) 前掲書(2), 979頁。
- (17) 前掲書(3), 塩沢, 433頁。
- (18) 『地理初歩』の初版において⑤promontoryの訳語として示された「罌」は, 今日まったく使われない語であるが, 翌年の改訂版で早くも姿を消している。
- (19) 『地理初歩』の底本である *Cornell's Primary Geography* は, 幕末の1866(慶応2)年幕府の文吏渡部一郎により, その一部が『地学初歩』というタイトルで翻刻されていた。そして, 翌1867(慶応3)年には, 津山藩の藩医の家系にある宇田川榕精により, その翻訳『地学初歩和解』が出版された(前掲書(9), 422頁)。
- (20) 前掲書(3), 菊地, 34頁。